

第2節 横穴式木室について

北摂ニュータウン（中央地区）の調査では、西山2・13・18号墳、平方1・2号墳の5基の横穴式木室墳が見つかった。西山7号墳の横穴式土壙と呼ばれる主体部もその流れを汲むものである。同様の主体部をもつ古墳は近畿地方から東海・北陸地方にかけて数十例見つかっていてその関連が注目されており、これまでにいくつもの論考が行われている（柴田1983、北野1983、森下1984、樫田1989、鈴木1991、岩中1993、藤井1994、松井1996など）。

ここではまず横穴式木室の概要を述べるために、藤井1994論文で設定されている横穴式木室の分布圏を一部改変して、地域ごとの特徴を紹介する。次いで三田盆地の横穴式木室墳を分類し、周辺地域の中の位置付けを行う。さらに類例や三田盆地での遺跡の在り方などから、古墳群の性格や成立の背景に言及したい。

なお横穴式木室墳および北陸の木芯粘土室墳の集成表を掲示しておく。これは鈴木1991・北野1983論文の集成の上に知り得た新資料を付け足したものである。ただし内容が不明確で、分布圏としてのまとまりを示していない事例は省いている。このうち「玄室の規模」は掘り方の大きさを基本にしているが、資料によって上端でとるもの、下端でとるもの、内法でとるものなどがあり、不統一となっている。また時期は人によって年代観が異なるので「須恵器の型式」に読み変えているが、過誤があれば当方の責任である。

1. 横穴式木室の分布圏とその特徴

A：遠江（磐田原台地）

棟持柱の主柱2本で棟木を渡し、壁際から垂木を架ける。木室の断面は合掌形で、粘土で被覆する。火をかけるものは少ない。

B：遠江（三方原台地）

壁際から垂木を架けて、断面合掌形とする。粘土で被覆し、火をかけるものは少ない。一部に伊勢地域からの影響で四隅に柱を立てるものがある。

C：伊勢

主柱のみを4本以上立てて、断面箱形の深い部屋を造る。粘土は使わず、当初は火もかけないが、TK217期以降になると火をかけるようになる。同時に壁際から垂木を架けて、断面合掌形とするタイプが現れ、火をかけるのが一般化する。

D：近江・摂津・河内・和泉・播磨・丹波

畿内の中でも周縁に近い所とその外側に接した地域である。壁際から垂木を架ける点だけは共通するが、他の要素は地域ごとに異なるため細分する。

D-1：近江・摂津・河内

主柱4本で梁・桁を組み、壁際から垂木を架けて断面台形にするものと、主柱2本か無しで壁際から垂木を架けて断面合掌形にするものがある。

そのうち近江・摂津（東摂）では粘土をよく用いて火をかける場合が多く、摂津（北摂）・河内では粘土を使わず、火をかけることも少ない。

第4章 西山古墳群の検討

横穴式木室墳集成表

分布圏	No	古墳名	所在地	墳形・規模	玄室の構造と規模	粘土	火化	須恵器の型式	備考	参考文献
分布圏A 遠江 (磐田原台地)	1	堀ノ内13号墳	静岡県掛川市	円 25						
	2	高尾向山5号墳	静岡県袋井市	円 12	合掌 3.8×2.2	○	×	T K43-T K209		袋井市1996
	3	高尾向山7号墳	静岡県袋井市	円 11	合掌 3.7×3.0	○	×	T K43-T K209		袋井市1996
	4	団子塚10号墳	静岡県袋井市	円						袋井市1992
	5	北山1号墳	静岡県磐田郡浅羽町	円 7	合掌 3.0×1.8	○	×	T K43		浅羽町1987
	6	北山2号墳	静岡県磐田郡浅羽町	円 11	合掌 3.5×2.2	○	○	T K43		浅羽町1987
	7	北山3号墳	静岡県磐田郡浅羽町	円 11	合掌 4.0×2.0	○	×	T K43		浅羽町1987
	8	北山4号墳	静岡県磐田郡浅羽町	円 11	合掌 3.5×2.0	○	×	T K43		浅羽町1987
	9	明ヶ島10号墳	静岡県磐田市	方 10	合掌 3.75×2.15	○	○	T K43		柴田1983
	10	権現山2号墳	静岡県磐田市	前方後円 18	合掌 3.6×2.8	○	×	T K10-T K217		柴田1983
	11	権現山3号墳	静岡県磐田市	円 10	合掌 4.2×3.0	○	×	T K43-T K217		柴田1983
	12	屋敷山1号墳(南)	静岡県磐田市	前方後円 17	合掌 4.5×約3	○	×	T K10		柴田1983
	13	屋敷山1号墳(北)	静岡県磐田市	前方後円 17	合掌 4.1×3.0	○	×	T K10		柴田1983
	14	屋敷山3号墳	静岡県磐田市	円 9	合掌 4.5×2.9	○	×			柴田1983
	15	勾坂下原17号墳	静岡県磐田市	円 12	合掌 2.4×1.0	○	×	T K217		磐田市1996
分布圏B 遠江 (三方原台地)	16	半田山B4号墳	静岡県浜松市	前方後円21.5	合掌 ×1.8	○	×			浜松市1970
	17	半田山D10号墳	静岡県浜松市	円 8	合掌 3.6×1.8	×	×	T K43-T K217		浜松市1988
	18	半田山E4号墳	静岡県浜松市	前方後円12.5	合掌 4.2×1.7	○	×	T K43-T K217		浜松市1988
	19	瓦屋西B1号墳	静岡県浜松市	円 5	1.9×1.2	○	×			浜松市1991
	20	瓦屋西B3号墳	静岡県浜松市	前方後円 28	3.4×2.1	△	×	MT15-T K209		浜松市1991
	21	瓦屋西B5号墳	静岡県浜松市	円 8	合掌 4.1×2.2	○	×	T K10-T K43		浜松市1991
	22	瓦屋西B7号墳	静岡県浜松市	円 10	合掌 3.7×1.8	○	×			浜松市1991
	23	瓦屋西D1号墳	静岡県浜松市	方 11	箱形 ×1.9	○	○	T K209		浜松市1991
	24	瓦屋西C5号墳-1	静岡県浜松市	前方後円 23	合掌 3.8×1.8	×	△	T K209		静岡県1991
	25	瓦屋西C5号墳-2	静岡県浜松市	前方後円 23	合掌 4.9×2.4	×	×	T K43		静岡県1991
	26	瓦屋西C10号墳-2	静岡県浜松市	円 17.5	合掌 3.9×1.5	×	×	T K43		静岡県1991
	27	瓦屋西C14号墳	静岡県浜松市	円 12	合掌 3.9×1.9	○	×	T K209		静岡県1991
	28	瓦屋西C17号墳	静岡県浜松市	円 10	合掌 5.0×2.1	×	×	T K43		静岡県1991
	29	瓦屋西C19号墳-1	静岡県浜松市	円 10	合掌 4.0×1.9	△	×	T K43		静岡県1991
	30	瓦屋西C19号墳-2	静岡県浜松市	円 10	合掌 3.9×1.9	○	×	T K43		静岡県1991
	31	瓦屋西C24号墳	静岡県浜松市	円 9	合掌 2.8×1.5	○	×	T K10		静岡県1991
分布圏C 伊勢	32	南山古墳	三重県伊勢市	円 17	箱形 5.7×4.1	×	×	T K10		伊勢市1982
	33	昼河A2号墳	三重県伊勢市	円 13	箱形 5.3×1.9	×	○	T K217		伊勢市1993
	34	昼河C12号墳	三重県伊勢市	不明	台形 3.5×1.5	×	○	T K217		伊勢市1993
	35	昼河C13号墳	三重県伊勢市	不明	合掌 3.08×1.5	×	○	T K217		伊勢市1993
	36	昼河C14号墳	三重県伊勢市	不明	合掌 2.57×1.35	×	○	T K217		伊勢市1993
	37	君ヶ口古墳	三重県津市	前方後円 18	箱型 5.60×3.48	×	×	MT15		津市1974
	38	小御門Ⅱ-2号墳	滋賀県蒲生郡日野町	円 14	台形 ×2.26	○	○			滋賀県1966
分布圏D-1 近江 (東濃) 摂津 (北摂) 河内	39	塚原古墳	滋賀県愛知郡愛知川町							
	40	新芦屋古墳	大阪府吹田市	方 20	合掌 ×2.92	○	×	T K209	家形石棺	吹田市1979
	41	上寺山古墳	大阪府茨木市		台形 約4×約3	○	○	T K209		茨木市1972
	42	上穂積神社西古墳	大阪府茨木市			○	○			
	43	西山2号墳	兵庫県三田市	円 7	合掌 3.1×2.1	×	×	T K209	横穴式土壙	兵庫県1999
	44	西山7号墳	兵庫県三田市	円 11.8	7.65×2.9	×	×	T K217		三田市1983
	45	西山13号墳	兵庫県三田市	円 8.3	台形 3.5×2.4	×	×	T K217		兵庫県1999
	46	西山18号墳	兵庫県三田市	円 11	合掌 5.8×2.8	×	×	T K209-T K217		兵庫県1999
	47	平方1号墳	兵庫県三田市	円 7.5	合掌 4.2×2.0	×	×	T K217		兵庫県1993
	48	平方2号墳	兵庫県三田市		合掌 ×2.2	×	○			兵庫県1993
	49	宇山1号墳	大阪府枚方市	円 13	合掌 4.5×2.8	×	×	T K209		枚方市1989
分布圏D-2 和泉	50	道田池2号墳	大阪府和泉市	円 14	合掌 3×2.45	○	○	T K209		信太山1966
	51	道田池4号墳	大阪府和泉市	円 15	合掌 4.7×2.4	○	×	T K209		信太山1966
	52	菩提池西古墳	大阪府和泉市		合掌 4.6×2.5	○	○	T K209		信太山1966
	53	聖神社2号墳(東)	大阪府和泉市	円 30	合掌 3.6×2.8	○	○			森1959
	54	聖神社2号墳(西)	大阪府和泉市	円 30	合掌 3.15×2.3	○	○			森1959
	55	明神原古墳	大阪府和泉市	円 18	3.4×2.3	○	×	MT85		和泉1992
	56	松尾塚原8号墳	大阪府堺市	円 13	合掌 3.5×2.1	○	×	T K10-T K209		大阪府1990
	57	松尾塚原9号墳-3	大阪府堺市	前方後円 17	合掌 約5×2.4	○	○	T K10-T K209		大阪府1990
	58	牛石5号墳	大阪府堺市	円			×			大阪府1977
	59	野々井30号墳	大阪府堺市	円 13	合掌 5.8×3.3	×	×	T K209		大阪府1987
	60	陶器千塚3号墳	大阪府堺市	円 16	合掌 ×約2	○	×	T K209		大阪府1994
	61	陶器千塚21号墳	大阪府堺市	円 15		○	○			森1961
	62	陶器千塚29号墳	大阪府堺市		合掌 ×2.0	○	×	T K43-T K217		堺市1986
	63	名草3号墳	兵庫県加東郡社町	円 13	合掌 6.1×2.8	×	○	T K209-T K217		加東郡1984
分布圏E 加賀	64	名草4号墳	兵庫県加東郡社町	円 10	合掌 5.4×3.1	×	○	T K43-T K217		加東郡1984
	65	中番2号墳	兵庫県小野市	円 9	合掌 2.5×2.5	○	○	T K217		小野市1969
	66	中番18号墳	兵庫県小野市	円 9.5	合掌 5.5×1.7	○	○	T K217		小野市1969
	67	中坂5号墳	京都府福知山市	円 18	合掌 約3×2.4	○	×	T K217		京都府1972
	68	中坂7号墳	京都府福知山市	円 13	合掌 5.5×2.85	○	×	T K217		京都府1972
	69	仏山1号墳	京都府福知山市	円 12	合掌 4.2×2.6	○	×	T K209-T K217		京都府1973
	70	蓼輪塚古墳	石川県小松市	前方後円 40	2.8×2.3	○	×	MT15-T K43	木芯粘土室	北野1983
	71	念仏林古墳	石川県小松市	円 10	2.7×2.2	○	×	MT15-T K43	木芯粘土室	北野1983
	72	矢田借田2号墳	石川県小松市	円 9	3.6×2.0	○	×	MT15?	木芯粘土室	北野1983
	73	矢田借田4号墳	石川県小松市	円 13	3.2×1.6	○	×	MT15-T K10	木芯粘土室	北野1983
	74	後山無常堂古墳	石川県小松市	円 23.5	2.9×1.9	○	×		木芯粘土室	小松市1989
	75	後山明神3号墳	石川県小松市	円 11.5	2.7×1.8	○	×	MT15	木芯粘土室	小松市1989
	76	分校山王1号墳	石川県加賀市	円 15	約3×約2	○	×	T K10-T K43	木芯粘土室	北野1983
	77	二子塚37号墳	石川県加賀市	円 12	×	×	×	T K43	木芯粘土室	北野1983
	78	末寺山7号墳	石川県寺井町	円 7	2.2×1.5	○	×	MT15-T K43	木芯粘土室	北野1983

D-2：和泉・播磨

主柱無しで、壁際からの垂木で断面合掌形にする。粘土を被覆するものが目立つが、播磨では使わないものもある。火をかけるものは多い。

D-3：丹波

棟持柱の主柱2本を直接床面に立て、壁際からの垂木で断面合掌形にする。粘土で被覆するが、火をかけた例は無い。

E：加賀

「木芯粘土室」と呼ばれ横穴式木室とは区別されてきたが、原理的には同じ横穴系の木室の一類型である。今のところ木組みは未発見だが、主柱穴（棟持柱）2本を検出した調査例がある。粘土を使用して断面合掌形の部屋を造り、火はかけない。築造開始は6世紀前半にまで遡る。

以上のように見ると、横穴式木室は特定の地域に固有の特徴をもって分布していることが判る。分布圏A～C・Eはその傾向がより明らかで、関与する集団が限られていたとみられる。一方畿内周縁部ともいえる分布圏Dは分布や特徴に多様性を内在しており、複雑な状況を呈している。

さて三田盆地のある摂津（北摂）は分布圏D-1に含まれ、摂津（東摂）・河内との関わりが窺える地域である。そこでまず三田盆地の横穴式木室を概観して周辺地域と比較し、分布圏Dにおける三田盆地の在り方を問いたい。

2. 三田盆地の横穴式木室

西山18号墳（59頁－第42図）

- 構造** 玄門両脇の2本の主柱（石室と対比させるならば袖柱と呼ぶこともできる）と壁際のピット列からなる。ピット列は掘り方が認められず、検出状況だけを見ると社町名草古墳群や和泉地方の木室と共通しているが、火は受けていない。
- 規模** 玄室の大きさは掘り方の下端で長さ5.8m、両側壁間の幅2.6～2.9m、玄室の長／幅指数2.23～2.00である。この数字は社町名草3号墳（第7図4）の6.1m／2.4～2.8m；2.54～2.17に近い値となる。
- 時期** 築造時期は西山古墳群Ⅳ期（TK209）の古相段階で、その後2回以上の追葬が行われている。

横穴式木室の復元（図版47～50）

なお18号墳では周辺で伐採した雑木を使って、柱穴に実際に木柱を立てて復元を試みた。以下、復元の手順を述べる。

- 骨組み** まず四隅の垂木を組み合わせて（図版47-1）その上で棟木を受け（同-2）、そこに三方から垂木を立て架ける（同-4）。棟木と垂木の結縛（同-6）には藤や葛の蔓の樹皮を剥いたものを使っている（同-5）。復元による垂木の角度は60°前後で（同-3）、柱穴の角度（70～80°）よりも緩くなってしまうが、この辺りは微妙なところである。2本の主柱は玄門の構えにのみ用いた（同-7）。垂木には部分的に筋違いを入れて補強し、合掌

形の骨組みに仕上げた(図版48)。

葺き上げ 次に茅葺きの屋根を葺くように、雑木から刈り払った粗朶を使って骨組みの下から順に葺き上げてゆき(図版49)、横穴式木室を完成させた(図版50)。現地の復元作業は福島県奥只見地方出身で茅葺きの屋根を葺いた経験のある五ノ井氏(図版47-8の前列中央)に負うところが大きく、それはあたかも合掌作りの屋根を地面に伏せたような構造物となった。

床面 復元の際には検出したピットに丸太を差し込んだが、ピット列自体には掘り方が認められなかったため、本来は木を組んだ後に掘り方の底面全体に粘質土を貼って床面を造る手順であっただろう。一方2本の主柱については床面の上で掘り方を検出しており、木室の構造に使われていたとすると齟齬が生じるが、玄門であれば問題ない。

因みに13号墳についても触れておくと、この場合はピット列に溝状の掘り方が伴っているため、床面を造った後に木を組んだと解することができる。

この復元は遺構に則して無理のないように考えた一案であるがもとより証拠はなく、より良好な資料が出土すればまったく違った復元も可能であろう。

西山2号墳(21頁-第4図)

構造 壁際の溝を掘り方とするピット列のみで主柱がないことから、合掌形の小木室であったとみられる。玄室内は礫床で、火は受けていない。

規模 玄室の掘り方の長さ3.1m、両側壁間の幅1.8~2.1mで、玄室の長/幅指数は1.72~1.47である。

時期 築造時期は西山古墳群Ⅳ期(TK209)の中相段階である。

西山13号墳(42頁-第23図)

構造 4本の主柱と壁際の溝を掘り方とするピット列からなる。4本の主柱で梁・桁を組む茨木市上寺山古墳のような復元案が想定できる。火は受けていない。

規模 玄室の掘り方の長さ3.5m、両側壁間の幅2.2~2.6mで、玄室の長/幅指数は1.59~1.34である。

時期 築造時期は西山古墳群Ⅴ期(TK217)の中でも新しい段階である。

西山7号墳(第7図1)

構造 横穴式土壙と呼んでいる大きな掘り方の床面に凝灰質砂岩の板石で組んだ箱式石棺を据え、開口部へ向かって排水口を設ける。横穴式木室とは異なるが、同じ横穴系の重流の埋葬施設として含めて考える。

規模 掘り方床面の全長7.65m、幅2.9~3.3mである。

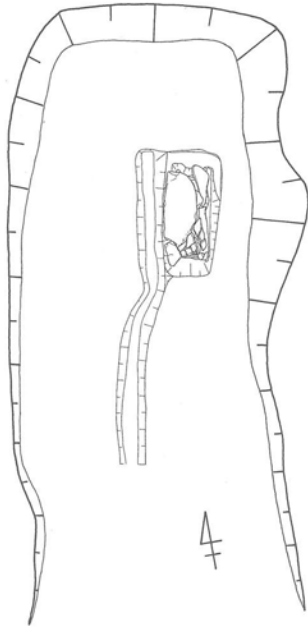
時期 遺構に伴う遺物が少ないが、築造時期は西山古墳群Ⅴ期(TK217)とみられる。

平方1号墳(第7図2)

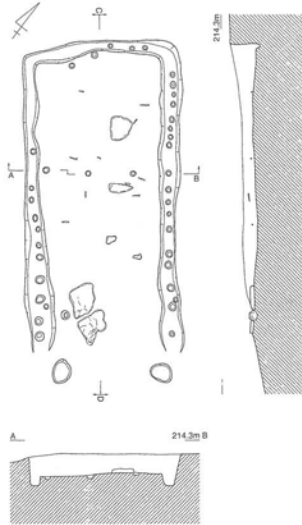
構造 2本の主柱と壁際の溝を掘り方とするピット列からなる。また奥壁から約1/3の所に3箇所の小ピットがあり、構造に関係する可能性がある。残りが悪く詳細は不明だが、西山18号墳に似た復元案を想定したい。床面から凝灰質砂岩の板石が出土している。炭化材も少量出土しているが、火は受けていない。

規模 玄室の掘り方の長さ4.2m、両側壁間の幅2.0mで、玄室の長/幅指数は2.10である。

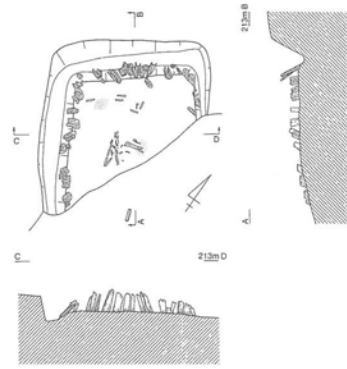
時期 出土遺物と凝灰質砂岩・鉄釘の使用からみて、築造時期は西山古墳群Ⅴ期(TK217)に



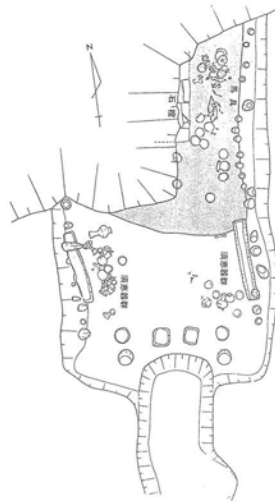
1. 西山7号墳(三田市1983より作図)



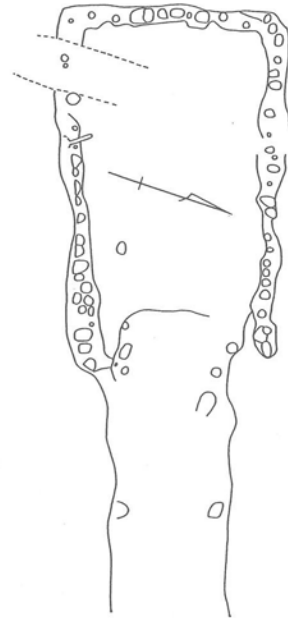
2. 平方1号墳(兵庫県1993)



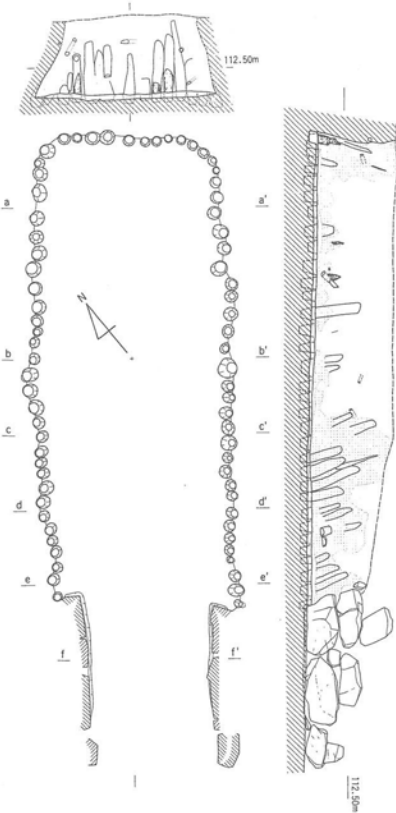
3. 平方2号墳(兵庫県1993)



5. 吹田市新芦屋古墳(藤原1979)



6. 枚方市宇山1号墳(財平方1988)



4. 社町名草3号墳(加東郡1984)



7. 茨木市上寺山古墳(茨木市1972)

第7図 摂津・河内・播磨の横穴式木室 (S=1/100)

下るとみられる。

平方2号墳（第7図3）

- 構造** 大半が削平されており、北半部の壁際の溝を掘り方とする炭化した柱材のみ遺存している。柱材はスギの割り木で、火を受けて立ったまま炭化している。北摂ニュータウン内の木室の中で火を受けているのはこの1例のみである。現状で構造の復元は難しいが、おそらく1号墳と同様であったと考えられる。
- 規模** 玄室の掘り方の残存長2.2m、両側壁間の幅2.2mである。
- 時期** 時期の判る出土遺物はないが、鉄釘の使用からみて、西山古墳群V期（TK217）の所産とみておく。

三田盆地の横穴式木室の類型

三田盆地の横穴式木室（土壙）を構造から分類するとA類「玄門の2本の支柱と壁際のピット列をもつもの（西山18号墳・平方1号墳）」、B類「4本の支柱と壁際のピット列をもつもの（西山13号墳）」、C類「支柱をもたず壁際のピット列だけのもの（西山2号墳）」、D類「掘り方のみでピット列のないもの；横穴式土壙（西山7号墳）」の4つの類型に分けられる（平方2号墳は不明）。

- A類** 玄門の両脇にのみ2本の支柱を使う断面合掌形の木室は、枚方市宇山1号墳（第7図6）に類例がある。また構造は異なるものの、西山18号墳のピット列の検出状況や玄室プランは社町名草3号墳（第7図4）に類似している。
- B類** 4本の支柱で梁・桁を組む断面台形の木室は、茨木市上寺山古墳（第7図7）に類例がある。また玄門の両脇に2本の柱を据えるという手法はA・B類に共通しており、両者は近い関係と言える。
- C類** 支柱を使わずに壁際の柱だけで構築する断面合掌形の木室は、播磨から和泉方面に類例が多い。ただし三田盆地では粘土を顕著に使う例はなく、火をかけるものも5例中1例のみである。
- D類** 西山7号墳は排水口を備えるところから「室」としての空間があったとみられるが、構造は不明である。奈良県広陵町馬見古墳群中の安部山第4号墳南土壙（奈良県1974）も床面に凝灰岩製の組合式石棺を据える。横穴式木室が13基集中する静岡県浜松市瓦屋西古墳群のC33・C34号墳（勸浜松1991）は「横穴式土室」と呼ばれており、木室墳との共存が目できる。西山7号墳も「室」である点を強調するならば「横穴式土室」の方が適当であろう。

畿内周縁部の中の三田盆地

以上のように木室構造からみると三田盆地の状況はバラエティに富んでおり、畿内周縁部（分布圏D）のうちの播磨・摂津・河内・和泉の木室とそれぞれに共通する部分をもっている。同じことは分布圏Dの他の地域にも当てはまり、互いに似た要素を少しずつ共有しあっている状況である。こうした在り方は畿内周縁部に点在する各地域同士が横の連絡を取り合っていたというよりも、畿内中枢部に想定できる各集団の故地（1箇所とは限ら

ない)を中心にした放射状の関係を表すものと考えた方が理解しやすい。「横穴系の掘り方」の中に「壁際の柱で支える上部構造」をもつ墓を造る集団が、各地で時と場合に応じて柔軟に手法を使い分けて地域ごとに独自の形態を生み出しているようである。

三田盆地の場合「顕著な粘土の使用」や「木室に火をかける」行為は抜け落ちている例が多く、主柱を用いる頻度が高い。三田盆地だけで眺めていると、木室を焼くという行為自体に他の地域で言われているほど本来的な意味合いがあるか疑問で、後から付加した要素ではないかと思われる。

3. 造墓集団の性格と系譜

西山古墳群を造り、そこに葬られた集団を考察するにあたり、まず北摂ニュータウン内の他の遺跡との関係を整理しておく(4頁、第3図)。

平方遺跡・平方西遺跡(兵庫県1993)

須恵器の窯跡3基と工房となる建物、工人の住居、横穴式木室墳2基が見つかっており、西山古墳群の母集団の1つである可能性が高い。見つかった須恵器窯の操業は西山古墳群のⅢ期の終わり頃からⅣ期にかけてである。Ⅴ期になると新たな墓域となっており、集落および生産の場は調査以前に造成された別の地点に移ったようである。

中西山古墳群(兵庫県1993)

4基の古墳のうち発掘調査した3・4号墳はいずれもⅣ期のもので、特に3号墳は調査されたものの中では唯一の横穴式石室である。石室の石材は武庫川の対岸から供給を受けたとみられるが、平方窯の操業時期に尾根続きの中西山にこうした古墳ができるということは、平方・西山の集団が対岸の在地勢力と一定の関係を保っていたことを裏付ける。

西山西古墳群(兵庫県1999)

西山古墳群から約150m西側の南向き斜面に3基の方墳が並んでいる。主体部内には厚い炭層が堆積し、2号墳では凝灰質砂岩の板石も使われていた。出土遺物が少なく築造時期がはっきりしないが、主体部の構造からみて少なくともⅤ期以降の所産であろう。

奈良山古墳群(三田市1983)

奈良山の尾根伝いに14基の古墳が点在しており、1箇所集中する西山古墳群の在り方とは対照的である。14基のうち1・2号墳は古墳時代前期かそれ以前のもので、在地の系譜を辿ることができる。調査された7号墳はⅢ～Ⅳ期の木棺直葬墳で、他も木棺直葬のものが多いとみられる。ただし奈良山12号墳は凝灰質砂岩の板石を用いた横口式石棺を主体部とするⅤ期の古墳である。

奈カリ与古墳・五良谷古墳群(兵庫県1983)・貴志古墳群(三田市1989)

奈カリ与古墳は凝灰質砂岩の板石を組み合わせて作った横口式箱式石棺様石室を主体部とし、奈良山12号墳と同時期とみられる。同じ尾根の先端にある五良谷11号墳はⅠ期の木棺直葬墳で、西山古墳群の開始時期に合致する。

さらに五良谷古墳群北東側の段丘上に、横穴式石室を内蔵するとみられる方墳2基を含む貴志古墳群がある。

北摂ニュータウン内の古墳時代の遺跡群の様相

吉士 古墳時代の遺跡は貴志から西野上にかけての丘陵上に営まれており、有鼻遺跡のある下井沢までいくと遺構は希薄になる。丘陵上の開発が始まったのは6世紀前葉(MT15期)で、古墳群の造営は7世紀後半(TK217期)まで続いている。この地域の古墳群は最後まで横穴式石室が一般化せず、特異な形態の終末期古墳や金銅製冠といった特殊な遺物の存在など、在地の多くの古墳群とは様相を異にしている。井守徳男氏は「貴志」の地名の由来などから渡来系氏族で安倍氏と同族の「吉士」氏の介在を想定している(井守1986)。だとすると貴志古墳群はその氏族長層クラスの墓とみられ、西山古墳群以下はそれに連なる各集団が造営した墓と言える。その中には奈良山古墳群のような在来の勢力も取り込まれているようである。

須恵器生産 この貴志から西野上にかけての集団の生業の一端は須恵器生産にあった。市内最古の須恵器窯跡は市域北部にあたる三田市末野の郡塚1号窯(兵庫県1987)の5世紀後葉である。そこまでは行かなくとも遺跡群の成立期に見合う6世紀前葉頃の須恵器窯が、北摂ニュータウン内に存在した可能性は高い。

分布圏Dの中で須恵器生産が行われている例は和泉・摂津(東摂)にあり、特に陶邑で名高い和泉丘陵では構造の類似から須恵器工人との関わりが早くから指摘されており(森1959)、三田盆地でもその関係を確認することができた。ただしすべての地域で満たされる条件ではなく、多くの要素の中の1つとして捉えるべきである。

凝灰質砂岩 三田盆地の古墳群でよく使われる石材に「凝灰質砂岩」がある。凝灰質砂岩層是三田市と神戸市の市境付近から猪名川町にかけての北摂山地に分布し(神戸市1989)、近くでは三田市横山町から神戸市北区長尾町宅原一帯の山塊に露頭がみられる(兵庫県1983)。この石材は北摂ニュータウン内の西山7・10・11号墳、奈良山12号墳、奈カリ与古墳、平方1号墳で使われている他、武庫川の対岸にある青龍寺裏山2号墳(高島・畠中1984)でも使用されており、三田盆地の終末期古墳に特徴的な遺物となっている。

同様な石材を用いた類例として、吹田市新芦屋古墳の横穴式木室に納められた組合せ式家形石棺がある(吹田市1993)。また兵庫県美囊郡吉川町実楽古墳(兵庫県1972)の玄室床面からも凝灰質砂岩の板石多数が出土している。この主体部は石室とされているが石材がまったく無く、墓壙壁に沿って溝状の掘り込みがあるなど不自然な状況を呈しており、木室であった可能性も捨てきれない。この他、神戸市北区北神ニュータウン内第2・3・20地点古墳でも横穴式石室に凝灰質砂岩の板石を使用している(神戸市1989)。ともかく凝灰質砂岩を用いた古墳がその産地である北摂山地を東西に横断するように分布しており、この石材を扱う集団が展開していたようである。

造墓集団の性格

三田盆地の武庫川右岸では6世紀代になっても横穴式石室が乏しく、西山古墳群や内神古墳群などのように小規模な木棺直葬墳で数十～百基単位の群集墳を造っている。同じような状況は加古川中流域左岸の小野市から社町域にかけての段丘～丘陵上に認めることができ、檜山古墳群、焼山古墳群、船木・中番古墳群など百基を超える木棺直葬の大群集墳

が知られている（岸本1997）。その中に中番2・18号墳、名草3・4号墳といった横穴式木室墳が含まれており、三田盆地に通じる在り方を示している。

上記の地域に共通する事象としては、古墳群や集落の立地する段丘・丘陵が6世紀頃に開発された新開地であったという点にある。新たな開拓にあたっては山林の伐採、耕地の開墾、灌漑工事の他、先に述べたような須恵器生産、石材の開発など形に残るもの残らないものを含めて多種多様な技術・知識が必要であっただろう。こうした作業に従事したのは恐らく既存の勢力だけではなく、畿内の有力氏族と同族関係を結びかつ土木技術をもった集団が大きな役割を果たしたとみられ、三田盆地の武庫川右岸にあつては安倍氏と同族で渡来系氏族の「吉士」氏に連なる集団の存在が想定できるのである。

5世紀から6世紀にかけて飛躍的に進んだ段丘の開発は、新しい土木技術の普及・標準化を全国的に促し、津々浦々に古墳が造られるような原動力として働いたであろう。その背景には新しい技術を携えた渡来系氏族の存在があり、彼らの墓の中にドーム型の天井をもつ石室・ミニチュアの炊飯具一式の副葬・横口式石室といった特徴的な古墳が含まれており（水野1970）、横穴式木室もそういった性格をもつ古墳の末席を占めるものではないか。ともかくこうした事象は渡来系氏族が各地に定着する過程を示すものであろう。

思えば昭和30年代に戦争引揚者などに対する農地の確保のために焼山古墳群が開拓で破壊された事件（岸本1997）などは、1400年の時を経て繰り返された極めて象徴的な出来事だったのだと言えよう。

なおこの執筆にあたって、村上賢治・藤井太郎の両氏から入手しにくい文献の提供を受け、かつ御教示を頂いた。また高島信之・榎田 誠の両氏からも有益な御教示を頂いた。兵庫県教育委員会関係の調査成果については、山本三郎・吉識雅仁・篠宮 正・長濱誠司・中村 弘・深江英憲の各氏から情報を得た。記して感謝の意を表す。

参考文献

浅羽町教育委員会1987『北山遺跡』

和泉丘陵内遺跡調査会1992『和泉丘陵の古墳－槇尾川中流域周辺の古墳群の調査－』（和泉丘陵内遺跡発掘調査報告書Ⅲ）

伊勢市教育委員会1982『南山古墳発掘調査報告』

伊勢市教育委員会1993『昼河古墳群』

茨木市教育委員会1972『上寺山古墳発掘調査概要』

井守徳男1986「畿内周縁部における古墳の展開と終末－兵庫県三田盆地における群集墳と終末期古墳の関連を例として－」『北山茂夫追悼日本史学論集 歴史における政治と民衆』日本史論叢会

磐田市教育委員会1996『勾坂下原古墳群・勾坂上5遺跡発掘調査報告書』

岩中淳之1993『昼河古墳群のまとめ』『昼河古墳群』伊勢市教育委員会

大阪府教育委員会1987『陶邑Ⅵ』

大阪府教育委員会1990『陶邑Ⅶ』

大阪府教育委員会1994『府営圃場整備事業陶器北地区に伴う陶器千塚発掘調査概要・Ⅲ』

小野市教育委員会1969『小野市中番地区群集墳調査概報』

樫田 誠1989「考察－所謂箱形粘土槨について－」『後山無常堂古墳・後山明神3号墳』小松市教育委員会

加東郡教育委員会1984『名草3号墳・4号墳』

岸本直文1997『小野市の考古資料』『小野市史』第4巻（史料編Ⅰ）

北野博司1983「箱形粘土槨の再検討と横穴式木室の関連性について」『北陸の考古学』石川考古学研究会

京都府教育委員会1972「中坂古墳群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』

京都府教育委員会1973「仏山1号墳」『上野平遺跡発掘調査報告書』

古代の土器研究会編1997『古代の土器5－1 7世紀の土器（近畿東部・東海編）』

小松市教育委員会1989『後山無常堂古墳・後山明神3号墳』

（財）大阪文化財センター1977『陶邑Ⅱ』

（財）浜松市文化協会1990『瓦屋西古墳群Ⅱ』

（財）浜松市文化協会1991『有玉西土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』上巻－瓦屋西C古墳群－

（財）枚方市文化財研究調査会1988『宇山1号墳現地説明会資料』

（財）枚方市文化財研究調査会1989『枚方市文化財年報Ⅹ』

堺市教育委員会1986「陶器千塚29号墳発掘調査報告」『平井遺跡』（堺市文化財調査報告第25集）

三田市教育委員会1983『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅰ』

三田市教育委員会1989『三田市遺跡分布地図』

滋賀県教育委員会1966『蒲生郡日野町小御門古墳群調査概要』

信太山遺跡調査団1966『信太山遺跡調査概報』

柴田 稔1983「横穴式木芯粘土室の基礎的研究」『考古学雑誌』68-4

吹田市教育委員会1979『吹田市文化財ニュース』No.2

吹田市立博物館1993『吹田の歴史と文化』（吹田市立博物館常設展示図録）

鈴木敏則1991「横穴式木室雑考」『三河考古』第4号

高島信之・畠中 剛1984「三田市青龍寺裏山1号墳出土の埴」『兵庫考古』第19号

田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

津市教育委員会1974『君ヶ口古墳発掘調査報告』

奈良県教育委員会1974『馬見丘陵における古墳の調査』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第29冊）

浜松市教育委員会1988『半田山古墳群（Ⅳ中支群－浜松医科大学内－）』

浜松市教育委員会1991『瓦屋西古墳群』

兵庫県教育委員会1972「実楽古墳調査報告書」『中国高速道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』

兵庫県教育委員会1983『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ』

兵庫県教育委員会1987「郡塚窯（AN-88）」『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書（1）』

兵庫県教育委員会1993『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅲ』

兵庫県教育委員会1999『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅴ』

袋井市教育委員会1992『団子塚遺跡－遺構編－』

袋井市教育委員会1996『高尾向山遺跡Ⅱ』

藤井太郎1994「横穴式木室に関する一試考」『文化財学論集』

藤原 学1979「大阪府吹田市新芦屋古墳の発掘調査」『日本考古学協会第45回総会研究発表要旨』

- 松井一明1996「高尾向山遺跡の横穴式木室墳について」『高尾向山遺跡Ⅱ』袋井市教育委員会
- 水野正好1970「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本第5巻 近畿』角川書店
- 水野正好1974「群集墳の群構造とその性格—小野市東野中番地区古墳群をめぐる分析—」『高山古墳群調査報告書』(小野市文化財調査報告書第6冊) 小野市教育委員会
- 森 浩一1959「窯槨を主体施設とする火葬古墳の新例—初期仏教受容の様相に関して—」『日本考古学協会第23回総会研究発表要旨』
- 森 浩一1961「大阪府泉北郡陶器千塚」『日本考古学年報』9
- 森下大輔1984「横穴式木室について」『名草3号墳・4号墳』加東郡教育委員会
- 山中敏史1986「律令国家の成立」『岩波講座 日本考古学6 変化と画期』岩波書店
- 和田晴吾1992「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本第五巻 近畿Ⅰ』角川書店
- 和田晴吾1998「古墳時代は国家段階か」『古代史の論点4 権力と国家と戦争』小学館

補遺

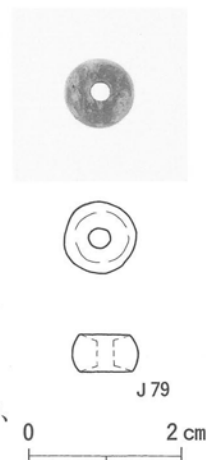
西山13号墳出土石製平玉 (J 79)

事実報告の原稿を入稿した後にこの遺物が洩れていたことが判明したので、ここで補足する。

側縁は球面を成し、上下端はシャープな稜線をもつ。上下の小口面は中央へ向かって薄くなり、臼状の面を成す。小口面中央の孔はおそらく片面穿孔であろうが、孔の直径がほぼ一定で穿孔方向は不明である。

大きさは直径が最大径で約9mm、上下端で約7mm、厚みが側縁で約5mm、中央で約3mm、孔の直径が約2.5mm、重さ0.7gである。

色調は灰オリーブ色で、所々に白斑が入る。石材はやや軟質であるが、緻密で平滑に磨かれているために、質の良い部分は光沢がある。材質はメノウ系の、比較的質の悪い石材かと思われる。



第99図 出土平玉